

次の文章を読んで後の問いに答えよ。

突然、目の前の海面をつきやぶって、黒い巨体はねおどった。小山のような塊がしやをおおう。¹

① セミクジラ——体長一五メートル、体重六、七〇トンの巨鯨が見せるブリーチである。体から流れおちる海水は、漆黒の皮膚のうでで白く泡だち、弓なりにそった口のあいだからは、水が滝のようにはじけちった。

セミクジラは、いままで目にしてきたザトウクジラやコククジラにくらべて、ひとまわりもふたまわりも大きく、太い。量感のある体が、青い空にのびあがり、飛びちるしぶきは、降りそぐ太陽をあびて、銀色にきらめいて見えた。

宙に浮かんだ巨鯨のあまりの大きさに、ぼくは写真をとることも忘れ、ただ呆然とあおぎながめていた。そのとき威容はくつきりと網膜にやきついて、とうとうと流れゆく時間の、この一瞬だけがとまったように思えた。²

やがてクジラは、海面に爆ぜたような水煙をのこして海中に消えた。そして、反動で大きくもりあがった波が、ぼくたちの舟をゆらして渡っていった。アルゼンチン、バルデス半島の南側、ヌエボ湾のできごとである。

二回目のパタゴニア行きのきかいも、ふいに訪れた。季節は前回とはちがって、南半球が春をむかえるころのことである。

夏の数カ月を、南極大陸をとりまく海でたつぷりと餌をとったセミクジラは、ほかの多くのヒゲクジラ類と同じように、冬には繁殖のための海域に移動する。南アフリカやオーストラリア南部、そして南アメリカ、パタゴニア周辺の海が、南半球のセミクジラが繁殖する海として知られている。

とりわけ南アメリカにやってくる個体群は、バルデス半島のまわりに密集する。南方の広大な海から、フォークランド海流にのってパタゴニアをめざしたクジラは、この半島がつくる小さな入江のなかで子どもを産み、育てるのである。

ぼくたちが旅をした春のはじめ、吹きすさぶ風をさけて入江の奥では、すでに生まれた子どもを、母親がいとおしむように育てている。子クジラは、海面に浮かぶ母親の体に乗るあげ、じゃれるように水をはじいた。

かれらは、もう一カ月半もすれば、夏の餌場にむけて南への移動を開始する。旅立ちまでのひとときを、母子はこのおだやかな海でゆつくりとすごすのである。

【中略】

入江のなかでは、ほんとうにさがす必要がないほどに、³そここで噴気があがり、海面に浮かぶ黒い背中を見てとることができた。ぼくたちは、⁴きゆうそく中のクジラをさまたげることがないように、エンジンを切って風上からしずかに舟を流していく。

遠く大地にそよぐ風の音、舟べりをたたく波の音、そして寝息だろうか、クジラのおだやかな噴気の音だけが聞こえている。そして、そのあいだにも、風がぼくたちをクジラのそばへ運びつづけていた。

接近してみると、セミクジラの体幅のひろいことにおどろく。背びれがなく、なだらかな背中をしているために「背美」とよばれたこのクジラは、海面にいては大きなフラットフォームが浮かんでいるように見える。

背中の上では、しばしばミナミオオセグロカモメが翼を休め、体表についた寄生虫やはがれかけた古い皮膚を漁っている。カモメの小さな嘴が背中をつくと、巨大な体がかすかにふるえた。ときには、舞いおりようとした瞬間にクジラが息を噴きあげて、あわてて空へもどるカモメもいた。

I、さつきぼくたちが目にしたように、どこかでブリーチがはじまるのを見てとると、⁴鳥たちはいつせいに飛びたつた。クジラの体が海面をたたき、水しぶきがあがったあとには、大小のはがれた皮膚が波にただよい、鳥たちはそれをねらって群がっていく。

II、セミクジラは泳ぐのが遅いために、大昔から捕鯨の対象になってきた。しかも皮下の脂肪があつく、死んでも沈むことがないために、小さな舟しかなかったころでもあつかいやすかったのである。

III、「まさにクジラ中のクジラ、正しいクジラ」の意味で「ライトホエール」とよばれた。和歌山県太地町は昔から、黒潮にのってやってくるクジラをとって栄えたところとしてよく知られている。町のクジラ博物館の正面に描かれているのも、このクジラである。⁵

苛酷な捕鯨によって、セミクジラはほかのどのクジラ類よりも早く、北大西洋では一八世紀の半ばまでに、その

ほかの海でも一九世紀の前半には、大幅に個体数を減らしていた。そして、その後は、捕らなくなったというよりはむしろ捕れなくなったために捕獲頭数は激減したものの、国際的な協定によつて全面的に捕獲が禁止されたのは、ようやく一九三五年になつてからであつた。明らかに、遅すぎる措置であつたといつていい。

何十年前前には、このクジラは世界中の海で、もつとも目にしにくい種のひとつであつたかもしれない。捕鯨が終つても、はたして回復できるだけの個体数をのこしているかどうかさえ、あやぶまれていた。

IV 幸い、ほんとうに徐々にではあるが、個体数を回復させてきた。そして、さきにあげたような繁殖海域で、少しずつ目撃されるようになってきた。

バルデス半島をとりまく海は、いまセミクジラのサンクチュアリとして完全に守られている。ロジャー・ペイン博士らの個体識別による調査では、この海に回遊してくる個体群は一二〇〇頭。そして南アフリカやオーストラリア南部の個体群をふくめると、現在南半球での生息数はおよそ三〇〇〇頭と考えられている。

さまざまな海で、さまざまなクジラたちとのわくわくする出会いがあつたけれど、パタゴニアでのセミクジラとの邂逅は、さらに刺激的なものであつた。

この海で、クジラはしばしば舟に体を寄せてすごした。とりわけ若い個体は、ありあまつた力を発散するかのように、頭で舟をぐいぐいと押し、下に潜りこんでは持ちあげようと試みた。

かれは呼吸のたびに舟べりに浮かんで、海面で顔を傾げるようにしては、片方の視線をぼくたちに送る。そのあとで、かれは体を起こして、噴気孔をこちらにむけて、せいっぱいの力で息を噴きあげた。クジラは、海面ごしにのぞき見る人間たちがかれに興味をしめしていることをまちがひなく承知していたはずだ。

それはちょうど、カリフォルニア半島の入江のククジラがそうであつたように、舟のうえの人間がおどろき、あわて、歓声をあげるのを、ほんとうに心から楽しんでるように思えた。そしてふたたびぼくたちを目でたしかめては、ようやくしぶきをぬぐつた顔やカメラに、容赦なく湿気をふくんだ生ぐさい息を噴きつけていった。

かれが海面からのびあがつたとき、口のまわりにわずかに毛が生えているのが見える。それはクジラが、かつて陸上生活をした祖先からひきついでいさんである。この海の哺乳類とぼくたちは、すでに越えることのできない深いしんかの淵をはさんで対峙してはいるけれど、体の各所に、昔同朋であつた痕跡をのこしている。

海中に入つても、若いクジラは旺盛な好奇心を見せた。ウェットスーツを身につけて、ぼくがそつと海のなかに滑りこむと、それまで舟とたわむれていたクジラがこちらに向きを変えて、ゆつくりと体を寄せてくる。そして、わずかに一メートルほどの距離をのこしてとまつた。

水中で見るセミクジラは、山のような黒い塊である。以前、シロナガスクジラを水中でながめたことがあるけれど、かれらの象徴的な大きさは、細くスマートなその長さである。それにくらべてセミクジラのほうは、とにかく胴まわりが太い。そんな量感のある巨塊が、ぼくの前にぼつかりと浮かんでいた。【I】

手をいっぴいにのばせば、こちらに向けた顔にふれることもできたろう。しかし、動物とわずかな隔たりをおいてむかいあうとき、いつも両者のあいだには不思議な了解のようなものができあがる。このときも、ぼくはクジラをおどろかすことのないように、あえてそれより前には出なかつたし、かれのほうもぼくにぶつかつてくることはなかつた。

間近で見る頭部や顎には、不規則なこぶ状の隆起が散在し、そのまわりにはフジツボやクジラジラミなどの寄生動物が付着して、黒い体のなかでそこだけが白つぽく光を反射して見えた。このこぶ状の隆起の形や位置で、個体識別がされていることは、前にも紹介したとおりである。

こうして、いったいどれだけの時間をすごしただろう。両者のあいだに不思議な一体感が生まれてくるような気がした。ぼくが試すように、ゆつくりと右や左にまわりこむと、巨大な頭部を同じほうへむけていく。ぼくが泳ぎはじめると後にしたが、海面に浮かぶと底に潜りこんで、上目づかいに水中の新参者をながめた。【II】

海中にただよう巨体が呼吸のために浮き沈みをくりかえすたびに、押しわけられた水が渦をつくつて、ぼくの体をゆらしつていった。そのあいだもかれの目は、しっかりとぼくを見すえている。それは、ぼくがかれにたいしてしていたのと同じように、かれもまたぼくの目の奥にあるなにかを読みとろうと試みていたのかもしれない。【III】

動物たちの生態や行動を観察し描写するとき、擬人的になりすぎることはたしかに注意すべきだろう。しかし、ことクジラ類にかなするかぎり、かれらのふるまいはあまりに個性的であり創造的である。おそらくは、一瞬一瞬の印象さえ大切にしながら、ひとつひとつの動きを読みとっていく——そうすることだけが、クジラという動物を理解する唯一の方法であるように思える。

人間がそばにすることで、かれの好奇心はいつそうたかまっていた。じつとただのように飽きたかれは、ぼくの何を何度も横切つてはしせんを投げかけ、そのたびに黒く大きな胸びれが目前を通りすぎていく。【IV】

巨体を小まわりに旋回させては、何度も何度もくりかえしていく。何度目かに、ぼくははじめてそつと手をさしだしてみたが、そのときのかれの対応は、じつに印象深いものであった。【V】

ぼくの指がクジラの胸びれにふれたとき、その目がかすかに動くのを見てとることができた。しかし、ふりほどくわけでも、おどろいて逃げるわけでもない。ぼくは、この野生動物が手でふれられるままに胸びれをさしだしていたことに、少しのとまどいとそれ以上の充足を覚えた。^⑧

こうしておよそ二時間を、ぼくは若いクジラと海中ですごした。やがて泳ぎ疲れて舟にもどろうとすると、かれが後を追う。巨大な生きものをつきしたがえての遊泳^⑨。そして舟にあがると、クジラはいままでいっしょにすごした人間の姿をもとめて泳ぎまわった。

ここでぼくたちは、遊び好きの友人の提案で、ちよつとした悪戯^{いたずら}を試みた。舟のうえの全員が底に腹ばいになつて、海面のクジラからは人間の姿が見えないようにしようというものである。

こちらからも、クジラの動きは見ることもできない。ただ舟べりで息を噴きあげる音や、巨体の動きが海面を波だてる音で、かれのようすやしぐさのひとつひとつを頭のなかに描いていた。

若いクジラは、いつそう夢中になつてぼくたちの姿をさがし、海面から顔をつきだし、体をおどらせて、波だつた海面はおおしく舟をゆらした。舟底に伏せたぼくたちは、しだいに騒がしくなる水の音に耳を傾けながら、ふきだすのをせいといっぱいにこらえていた。^⑩

クジラが懸命^{けんめい}になつて動きまわっていることは、¹⁰気配^{きはい}からも明らかだった。かれは最後には、海面からのびあがつた体を舟べりに乗りあげるようにして、舟のなかをのぞきこんだ。舟底から見あげたぼくの目と、のぞきこんだクジラの視線があつたとき、かれの目に不思議な安堵^{あんど}の波がよぎつたように見えた。

もうかくれる必要はなかった。腰をのばして空をあおぐと、雲ひとつない蒼空^{あおぞら}がひろがっていた。

一カ月あるいは二カ月にわたつて、毎日小さなボートや舟で海に漕ぎだしてクジラを観察していると、かれらは^⑩ときおり巨大な体にふさわしい、おおらかな好奇心をぼくたちにむける。

コククジラやセミクジラ、あるいはメキシコ、リビヤヒヘド諸島の海で出会つたザトウクジラの親子のように、

かれらのほうから興味をしめして舟のまわりを泳ぎ、海中に潜つたぼくとたわむれにやってくる。それは、毎日の接触をとおして、クジラがぼくたちの存在を認め、わずかな時間をそばですごすことを許す——そんな印象さえうける。

ハワイの海ではじめてザトウクジラを至近の距離でながめてから、すでに一四年がすぎた。はじめは、その巨大な体に魅せられたただだったけれど、経験の深まりとともにクジラを見る見方も確実に変わつてきた。

ひとつのきつかけが、カリフォルニア半島の入江でのコククジラたちとの出会いであつたことはいうまでもない。つまり、気まぐれに舟や人間たちのそばでたわむれる、そんなかれらの意識や感性のありように心を惹かれるようになったのである。

そしてこの海で、ぼくはほんとうに心を開いてクジラをながめ、噴気の音を聞き、肌にくれることができた。つまりクジラとのかかわりが、五感^⑪すべてを介しての体験であることを知った。

(『クジラ 大海原をゆく』 水口 博也)

語註 註1 ブリーチ……クジラのとる大きなジャンプ。

註2 サンクチュアリ……安全地帯

註3 邂逅……思いがけなく出あうこと。偶然の出あい。

受験番号

氏 名

一、 1～10のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。(送りがなも書くこと。)

5	4	3	2	1
試みる	きゆうそく	きかい	やく	しや
10	9	8	7	6
気配	遊泳	しせん	しんか	いさん

二、 ア～ウの意味を書きなさい。

ウ	イ	ア
新参者	承知する	密集する

三、 a・bを使って短文を作りなさい。

b	a
あやぶむ	ふい

四、次の問いに答えなさい。

問 1 ——— ①「セミクジラ」の名前の由来は何か、説明しなさい。

問 2 ——— ②「この一瞬だけがとまったように思えた」のはなぜか、説明しなさい。

問 3 ——— ③「さがす必要がないほどに、そこそこで噴気があがり」とありますが、多くのクジラは何のためにここにいるのか、説明しなさい。

問 4 ——— ④「鳥たちはいつせいに飛びたつた」とありますが、何のために「飛びたつた」のか、説明しなさい。

問 5 I Ⅳ の空欄に当てはまることばを、次の語群より選び、記号で答えなさい。

語群 ア、ところで イ、しかし ウ、こうして エ、そして

I		II		III		IV	
---	--	----	--	-----	--	----	--

問6 —— ⑤「セミクジラはほかのどのクジラ類よりも早く、北大西洋では一八世紀の半ばまでに、そのほかの海でも一九世紀の前半には、大幅に個体数を減らしていた。」について、次の問いに答えなさい。

①ほかのどのクジラ類よりも早く、大幅に個体数を減らしたのはなぜか、答えなさい。

②この例と同じように大幅に個体数を減らした生き物の例を、減らした理由を明らかにして説明しなさい。

問7 —— ⑥「不思議な了解のようなもの」とはどのようなものか、説明しなさい。

問8 —— ⑦「両者のあいだに不思議な一体感が生まれてくる」とはどのようなことか、説明しなさい。

問9 —— ⑧「少しのとまどいとそれ以上の充足を覚えた」とありますが、「少しのとまどい」と「充足」をそれぞれ説明しなさい。

「少しのとまどい」

「充足」

問10 ——— ⑨「ふきだすのをせいっぱいにこらえていた」とありますが、なぜ「ふきだ」しそうになったのか、説明しなさい。

問11 ——— ⑩「かれらはときおり巨大な体にふさわしい、おおらかな好奇心をぼくたちにむける」とありますが、このようなクジラの様子を、筆者はどのように感じているか、説明しなさい。

問12 次の一文を補うのに適する箇所を、【I】～【V】から選び、記号で答えなさい。

それは、じっさいにふれはしないけれど、水をとおしてぼくの感触をたしかめているようにも見えた。



問13 ——— ⑪「クジラとのかかわりが、五感すべてを介しての体験である」とありますが、この説明として正しくないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、クジラとのかかわりは、対峙したときに感性をとぎすまし、目の奥にあるものを読みとろうとすることである。
- イ、クジラとのかかわりは、クジラの意識や感性のありように心をむけ、噴気の音を聞き、肌に触れることである。
- ウ、クジラとのかかわりは、クジラを生き物の一つとして、論理的にとらえ他の情報に影響されず見ることである。
- エ、クジラとのかかわりは、一瞬一瞬の印象でさえも大切にしながら、ひとつひとつの動きを読みとることである。

